

(十四) 水沫 みなわ

遷都後のゴタゴタが落ち着いたところで、不比等は『古事記』を思い出した。

(そうだ。あれを焼いてしまわねば。)

自らの手で焼こうとして二、三枚めくって見た。

(うん。なかなか面白い。歌物語は佐留が集めたのだったな。)

ついつい引き込まれてしまう。今書かせている史書との違いは歴然としている。とうとう最後までざっと眼を通してしまった。

(さすがだな。なかなか面白い。それに、これには浄御原宮大王が書かせたという権威がある。これを利用しないという手はないな。)

もう一度初めから読み直してみる。おおよそは読めるが、結構読めない文字もある。

(誰かな。わからぬ字を書きおって。)

佐留の初期の歌がよく似ている。和語を漢字で表すのは難しい。工夫に工夫を重ねて、今では表記にもおおよその決まりができるようになった。『古事記』の読みを覚えている舎人がいると言うので、不比等は太安麻呂に書き直しをさせた。更に制作中の正史と違う部分の書き換をも命じた。

安麻呂は先ず『古事記』の神代の巻を『天神賀詞』と矛盾しないように書き換えた。勿論不比等の指示で中臣氏の先祖という神々を天照大神の下で随所に配置、活躍させる。中でも天照大神に代わって天孫に指図するのは高木神。この神は宇宙で最初に現れた三神の中の一柱高御産巢日神の別名とする。

ついでに太氏を磐余彦の子孫として権威付けることも忘れない。都合の悪いところは削ってしまった。それでも天神や国神の歌物語は面白くて削ることができない。適当に手を加えて残すことにした。

『古事記』の書き換えが終わると早速阿閉に献上した。不比等としては、やはり阿閉の反応が気になる。だが、何日たっても阿閉は何も言わない。

「恐れながら、『古事記』はお気に召しましたでしょうか。」

不比等が気にしていることはわかっている。だからこそ、ことさら無視してきた阿閉である。

「これは浄御原宮大王が書かせられたものなのですね。」

「さようでございます。」

「天照大神が皇孫をお降しになるのですね。」

「さようでございます。」

(嘘つきめ。浄御原宮大王は皇子たちに位をお譲りになるおつもりだった。皇孫などと書かせられるわけがないではないか。)

平然と答える不比等に怒りを覚えながらも、阿閉もまた顔色ひとつ変えない。そんな阿閉に不比等は頬を緩めて続ける。

「だからこそ、おおきすめらみこと太政天皇の後にはさきのすめらみこと太行天皇が立たれ、お上の後には。」

「おびとのみこ首親王が立つというわけですか。」

「やようございます。」

『たかきのかみ高木神』というのがいきなりでてくるようですが。」

(来たな。)

不比等はことさら神妙に答える。

「そのようすな。高御産巢日神のことだと注がついておりましたようでございます。」

「高御産巢日神とは最初に現れた三神の一人とあります。ということは天照大神より高貴な神ということですね。」

「さあ、先に生まれたからといって高貴とは言えないのではないのでしょうか。」

「途中から天照大神に代わって、高木神が皇孫に指令をだしているようすか。」

「さようでございますなあ。多分、おおみかみ大神のご意向を受けてのことと存じます。」

「皇孫の母は高木神の娘とあります。つまり高木神はそなたということですね。」

不比等は笑った。笑うしかない。

「とんでもございません。浄御原宮大王が臣のことなどご存知のはずでございます。」

阿閉も笑った。笑うしかないではないか。

(やはり高木神は無理だったかな。正史の方は直したほうがよさそうだ。)

阿閉の笑いを不比等がどのように理解したかはわからない。ともあれ不比等の上進した『古事記』は阿閉の手文庫に納められ、長く目の目をみることはなかった。

一方で正史の記述はなかなかはかどらない。不比等は新たに文官を投入して編纂を急がせる。精気の固まりのようだった北辰の星の申し子不比等も先が気になる年になった。

おびと首が十四歳の夏。大伴安麻呂が死んだ。壬申の乱の功労者として不比等には煙たい存在だった。その安麻呂が死ぬと、待ちかねたように不比等は阿閉に首の元服を打診する。軽は十五歳で即位している。首も十五歳で即位す

るには、今年のうちに元服させておかねばならぬ。后の子ではないという弱みはあったが、もう構ってられない。不比等も年をとって気が短くなった。あれだけ入念に謀をめぐらして、一步一步権力の階段を昇ってきたこの男も、重石が取れた途端に抑制が効かなくなったのだろうか。

「まだ早いではありませんか。余り早過ぎてまた病気になるっては可哀想です。」

阿閉は渋って見せるが、不比等はもう誰にも遠慮はしない。阿閉はこの時を狙っていた。胸が高鳴る。交換条件である。あくまでもさりげなく。不比等に真意を悟られてはならない。

「では、その代わりとっては何ですが、吉備の子供たちを親王の列に加えないのですが、よろしいですね。」

不比等は一瞬ためらった。

(この女、何を考えているのだ。)

「お上には、首親王に御位をお譲りになるおつもりだったのではございませんか。」

「勿論、そのつもりです。でも、吉備の子供達も今のままでは可哀想です。」

「お気持ちには承りました。早速手配致しましょう。」

引つかかるものはあった。

(即位さえしてしまえばこちらのものだ。)

この男にしては油断だった。

翌年の即位を前提とした元服に、態度を硬化させたのが、志貴である。近江宮大王の子である志貴はこれまでの継承問題には傍観者の立場を取ってきた。だが、不比等の意図が明らかになるにつれて義憤を抑えることができな。萩の花を見ながらいつものように長の佐紀宮で歌の話をしているうちに、抑えた鬱憤が噴き出してくる。近くで鹿が妻を呼んでいる。

「これまで藤原氏の母を持つ皇子が、即位した例はありませんぞ。だいたい、壬申の乱はなぜ起こったのか。大友皇子は卑母の出だった。だからこそ人は大友皇子に従わなかったのです。首親王ではまた争いが起きますぞ。それに、浄御原宮大王は氏族が外戚となつて権力を持つことを嫌われて、王族を后に据えるように定められたのです。右大臣の野心は明らかです。首親王を即位させてはなりません。」

日頃おとなしい志貴の、珍しく高ぶつた言葉に長は不安を覚えた。

(獵人に聞かれねばよいが。)

矢に射られた川島の姿がまぶたの裏に焼きついている。

この日は穂積も一緒である。志貴の激しさに煽られたか。穂積としても黙ってはいられない。穂積の母は名門蘇我氏の出である。かつては蘇我氏の血筋でなければ大王になれなかったものである。成り上がりの藤原氏などに負けてはいられない。殺された紀^キ后^ノの兄である穂積は、不比等と三千代への

怒りを腹の奥底深く押し隠している。最近大伴安麻呂の若い娘の元に通いだしたのは、大伴氏の兵力に惹かれたからであろうか。もともと、今は妻となつた坂上娘女的美貌と才気に心底惚れ込んでいる。もともと風流の人である。天皇の位に未練はあるが、自ら名乗りを上げるほど馬鹿ではない。

「日継は后腹と決まったものでもありませんぞ。それにしても首親王はまだお若い。天皇の位は荷が重過ぎましょう。余り早くに即位されて、太行天皇のようにご病気になるれてはお気の毒です。ここは長皇子が即位されるのがよろしいでしょう。」

これには長が慌てた。

「よして下さいよ。この中では私が一番年下ではありませんか。私はまだ死にたくはありませんぞ。」

冗談のつもりだった。だが、獵人は鹿の鳴き声に耳をそばだてている。鹿に気づかれないように足音を忍ばせてひたひたと獲物に迫っている。

首の即位の準備は着々と進められている。年が明けると、首は初めて皇太子の礼服を身に付けて阿閉に新年の拝礼をした。氷高と穂積は一品に、志貴は二品に昇り、吉備の子供達も皇孫の列に加わった。だが五月になっても阿閉は讓位する気配がない。

そうこうするうちにも日照りが続いて、諸国は飢饉の様相を呈してきた。更に遠江国では大地震が起こって、山が崩れ、河を堰き止め、多くの民家や田畑が水没した。余震が続いて人々は不安に怯えているという。

「こんな時に、讓位どころではないでしょう。」

首の即位に向けた人事異動まで発令して、それとなく讓位を促す不平等を、阿閉は叱りつけた。

遠江の地震から十日後に、今度は三河国で地震が起きた。正倉が四十七棟も壊れ、民家の倒壊は数えることもできない。都でも大きな揺れを感じた。

大地の揺れ以上に人心の揺れは大きい。

六月、阿閉の心を震撼させる事件が起こった。

「長親王様が落馬して亡くなられました。」

「まさか。長親王の乗馬の腕は親王たちの中でも群を抜いていたではないか。訳もなく落馬などされるわけがない。」

阿閉の顔が引きつる。長はまだ四十をいくつか過ぎたばかり。早過ぎる死の裏に何があるのか。阿閉の受けた衝撃は大きい。

「誰かが馬に細工をしたのではありませんか。」

氷高の顔も青ざめている。長は亡くなった夫の兄である。夫の死の記憶が鮮やかに蘇ってくる。氷高の胸は怒りで震えた。

「馬に細工をした者がいないか、徹底的に調べなさい。」

氷高の口調が厳しくなる。

衝撃から心を癒す暇もない。地震に加えて日照りはますますひどくなる。

田畑はひび割れ、稲は立ち枯れた。天災は為政者の不徳のなせる業だという。

阿閉は寺々で経を読ませ、神々に祈った。疲れきっていた。雨が降った時は、心底嬉しかった。

だが、七月に入っても地震はおさまらない。遂に大音響と共に宮殿の屋根が一部壊れた。逃げ遅れた采女が二人、下敷きになった。阿閉は胸の潰れる思いである。

「柱に傷をつけた者がおります。宮殿を壊してお上のお命を狙おうとしたのかもしれない。」

穂積が報告する。

「不比等であろうか。私に讓位させたがっている。私が譲らないばかりに、罪のない者が死んでいく。」

「弱気になられてはなりません。お上のお祈りのおかげで雨が降ったのです。」

あめのしたのおおみだから

天下百姓（こ）こ）とく、お上の（ご）在位を喜んでおります。」

穂積にすれば、首に即位されては、自分の目がなくなる。

地震は続く。壊れかかった宮殿にそのまま住み続けるわけにもいかない。

「これは直さねばなりません。しばらくみかのほろ甕原離宮へお移りなされませ。」

あそこなら狭いから警護も行き届きましょう。」

長屋が勧める。氣力を失いかけている阿閉を氣遣う氷高の顔にも、疲労の影が濃い。右大臣の不比等は奈良に残って宮殿の復旧を指揮する。穂積はひそかに柱に傷をつけた者の探索に乗り出した。

その穂積が寝込んだという知らせが入ったのは三日後である。

「お疲れが出たのでしょうか。しばらくお休みになればすぐよくおなりでしょう。」

不比等は相変わらず細々とした氣遣いを忘れない。だが、周囲の祈りも虚しく、旬日を経ずして穂積もまた帰らぬ人となった。

「次は俺の番か。」

三人で首親王の即位を批判したのを聞かれていたに違いない。音もなく忍び寄る死の影に、志貴は薄ら寒い思いである。

雨がしとしとと降り続けている。迫り来る夕暮れを背にじつと動かない志貴。目の前にあるのは、長と二人で編集した二巻の『万葉集』。志貴の胸に万感の想いが込み上げる。怒りで頭が破裂しそうに痛む。いきなり短剣を手にすると不比等と三千代の歌を切り取って、真つ逆さまに剣を突き立てた。切り裂かれた名前が嘲るように笑い出す。

「おのれ。不比等。」

怒りと恐れで咄嗟に紙をグシャグシャに握り潰すと燭台に翳した。紙は炎を上げてメラメラと燃え上がる。志貴の顔が赤黒く歪ゆがんで凄まじい形相ぎょうそうを見せる。

紙が燃え尽きて、燭台の火は何事もなかったかのように燃え続ける。静かに燃える炎を眺めていると、志貴の胸に悲しさと虚しさが満ちてくる。左留の歌が思い浮かぶ。

巻向の山辺とよみて行く水の

水沫のごとし世の人われは

(1269)

（水沫か。そうかも知れぬ。だが、俺という人間が、この世で見たり考えたりしたことまで幻だというのか。違う。俺がこの世に生きてきたのは事実だ。たとえ水沫であろうとも構わない。俺は俺の見てきた人々の嘆きを後の世に残すことで、嘆きながら死んでいった人々の魂を慰めたいのだ。そして、この歌集を読む者に、不比等の野望を伝えたいのだ。）

志貴はこの二巻の歌集を長の息子長田王に託す。

八月、志貴もまた二人の皇子の後を追うことになる。

いつの間にか舍人の宮から結子の姿が消えている。

相継ぐ皇親の悲報に阿閉は打ちひしがれている。

「私が讓位すれば全て収まるのではないか。」

「と、おっしゃるのは、全て不比等のなせる業だとお考えなのですね。」

「そうは思っておりませんが。」

氷高の問いに答える声も痛々しい。張り詰めた氷高の顔も曇らざるを得ない。

氷高の胸は一つの決意を秘めている。夫の死から十五年余り。その歳月が誰も気づかぬうちに氷高の内面を鍛え上げた。

「わかりました。どうぞ讓位あそばして、ゆっくりお休みになって下さいませ。でも、私は不比等には負けません。不比等にだけは負けたくありません。」

氷高は阿閉に頬を寄せると、一言そつと囁いた。その眼はいたずらっ子のようにキラキラと輝いている。阿閉の顔色が変わった。

「いけません。そんなことをしてはそなたが殺されます。私は許しませんよ。」

「大丈夫。私を殺すほど、不比等は馬鹿ではありませんよ。」

阿閉はまじまじと氷高の顔を見つめた。

（美しい。いつの間にかこんなにきれいになったのか。）

眼を見張る思いだった。もともと美しい娘だった。内に秘めた決意で引き締まった肌がまがましいほどに照り輝いている。

「心配なく。不比等ともうまくやっていますよ。それに長屋王を始め、王族は皆、私たちの味方です。他の者たちも黙っているだけで、不比等のやり方を憎んでいます。」

まぶしかった。氷高の内から発する光が、阿閉の心を奮い立たせる。

「わかりました。もう一度だけ、やってみましょう。」

「そうですとも、お母様。こうすれば、不比等の書いた筋書きは崩れてしまいます。不比等などに負けてなるものですか。」

「それから、首を不比等から取り返しませう。」

「不比等は宮子を首に会わせないそうです。宮子に何か秘密があるはずです。」

「もし、首を取り返せない時は。」

「吉備の子供達が遅たくましく育っています。そのためにも、お母様。」

「わかっていますとも。決して不比等より先には死にません。」

二人はしっかりと両手を握り合わせた。阿閉は体中に流れる王家の血がフツフツと沸き立つのを覚えた。

氷高に支えられるようにして、甕原みかのはらから戻った阿閉を迎えた不比等は、阿閉のやつれ様にはくそ笑んだ。勿論、顔には出さない。

「丁度よろしゅうございました。たった今、使いを差し上げようと思っていたところです。先程大宮の修理が終わりました。どうぞ、ご検分下さい。」
見上げた宮殿は、一部に真新しい柱を継ぎ足して、元の威容を取り戻している。

(私もまだまだ頑張らねば。)

傷跡をむき出しにしてなお聳え立つ柱に、勇気づけられる思いだった。

決めたからには早い方がよい。阿閉はことさらに声を落とした。

「ご苦労でした。ご苦労ついでにもう一つ。即位の式の支度をしてはもらえまいか。」

顔を上げた不比等の丸い眼が、更に大きく見開かれた。阿閉の艶を失った頬が、その疲労を物語っている。不比等の顔が紅潮してくる。

(やった。ついにやったぞ。)

小躍りしたい思いを抑えて退出すると、すぐに首の即位の準備にとりかかった。まず、志貴の喪は一年間伏すことにした。夫人腹おおとこの首の即位である。

よほど垂々しい瑞祥ずいしょうを用意してやらねばなるまい。

「白い雉とか、赤い雀とか、何でもいいのだが。何か変わった物はないか。」
四方八方手を尽くして、ようやく変わった亀を探し出した。左目が白く、右目が赤い。背中や脚の模様が文字に見えないこともない。

「こいつはいい。」

全てが整った。讓位は九月二日と定められた。

当日は在京の官人達のほとんどが大宮の前の庭に集まった。首皇太子が先頭に立って、阿閉の出御を待つ。その頬が緊張で紅潮している。首、この時

十五歳。軽が即位したのも十五歳だった。楯を立てるのは、旅人率いる大伴氏の一族。

やがて阿閉が氷高を従えて着座する。と同時に後ろに従った長屋が、さかさず詔を読み上げた。

「乾道は天を統て、文明是に於て曆を御す。……」

(どうしたのだ。詔を読むのは中臣意美麻呂のはずではなかったのか。)

意美麻呂は不平等の隣で詔書を手にしたまま、呆氣あっけに取られている。首が

怪訝けげんな表情でこちらを窺っている。だが集まった官人達は何も知らない。黙

つて頭しんを垂れて長屋の読む詔を聞いている。

長屋は続ける。

「……皇太子に譲らんと欲すれども、年齒幼稚にして、未だ深宮を離れず、……」

「右大臣殿。如何いたしましたよう。」

我に返った意美麻呂が小声で不平等に囁く。不平等の丸い顔は真っ赤だ。怒り握り締めた拳が震えている。

「……一品氷高内親王は……」

(何。氷高。まさか。)

思いがけない名だった。

「……今皇帝の位を内親王に伝ふ……」

(やられたな。俺としたことが油断していた。)

直ちに氷高が着座して、即位の詔が読み上げられる。更に瑞龜ずいきを得たこと

を寿ことほいで靈龜れいきと改元され、大赦が発表された。一旦官人達の前で読み上げ

られた詔を覆すことはできない。不平等の頭の中は今後の対策を練るのに忙しい。

ふと視線を感じた。見られている。

(笑っているな。俺としたことが。とんだ醜態しゅうたいを晒さらしてしまった。何の。

これしき。面白いではないか。お手並み拝見おてなびみはいけんといこう。)

ゆっくり頭を上げると、真っ直ぐ玉座を見上げて微笑んでみせる。阿閉も微笑を返す。

(まだまだ負けませんよ。そなたの知恵には叶わなくとも、必ずそなたより長生きして見せましょうぞ。)

王家と藤原家との攻防は、まだまだ始まったばかりである。

(完)